

国語科 授業の様子 授業者： 村田 茜

国語科では第3学年「言葉との向き合い方を考える―『それでも、言葉を』」の単元で授業を公開しました。単元のねらいは「筆者の考えや友の考えから得た気づきと、自己の考えとの共通点や相違点を基に、自己の考えを更新し、自分の意見をもつこと」です。本時は、自分は今から言葉とどう向き合っていくとよいかについての考えを共有する場面で、共通点や相違点に着目して友の考えを学習カードに記録し、自分の考えと比較することを通して、自分の考えに影響している事柄は何か自覚しながら学習問題に対する自分の考えを広げることを目指しました。



【導入】教師は、「単元の学習問題に対する考えはあるけれど、うまく言葉にならない。」という生徒の思いを全体に共有しました。さらに、教師は、答えが一つでないことについて考える際の方法として4月に“対談”を行ったことを想起する場を設け、互いの考えを引き出し、考えを明確にするために対談を行うことを提案しました。生徒は、「共通点や相違点について着目した。」や「なぜそう考えたのか質問し合い、具体例を尋ねた。」と4月の対談の際に着目した点を想起し、教師は、学習課題「共通点や相違点、理由などに着目しながら友の考えを学習カードに記録し、友と互いの考えを引き出し合って自分の考えをまとめよう。」を据えました。

【展開】K生は、R生の「言葉の二極化が問題だと思うから、意味を理解して様々な言葉を使って微細に表現したい。」という考えを聞き、「言葉に向き合うにあたって、言葉の表面だけを受け取って単純化し、すぐに評価する、思考の二極化がそもそも問題なのではないか。」という考えをR生に伝えました(写真)。「言葉の二極化」と「思考の二極化」について捉えの違いを感じたK生とR生は、互いになぜそう考えるのかを問い、学習カードに記録しました。対談を続ける中で、「使う言葉によって人々が二極化するのではなく、言葉の肌理を受け止めなければ二極化していく。」という結論に至りました。R生のもった「受け止めるものは具体的に何か。」という疑問に対して、K生は具体例を挙げて説明しようと試みました。その中で、K生は、言葉の意味とは裏腹に、相手の思いやりを感じた具体的な経験を示しながら、「言葉の意味だけでなく、そこに込められている思いみたいなものを受け取りたい。」と語りました。K生は、R生の考えと自分の考えの相違点に注目したり、R生からの具体を問う質問によって自分の中の経験と言葉に対する考えを結び付けたりすることで、対談を通して自分の考えに対するより具体的な根拠をもちました。



【終末】R生と対談を終えたK生は、「どんな言葉にも、発した人の思いや考え、経験が込められている。自分は言葉の意味だけでなく、その中身に触れたいと思ったし、中身に触れるには相手の温度や表情が分かる対話が必要だと改めて感じた。対話をして自分の受け止めがいつも正しいとは限らないし、いつもうまく伝わっているとは限らないけれど、それでも私は自分や相手の言葉の中身を知りたい。他者と関わっていきたいから、間違ってもいいから関わり続けたい。」と自分の考えをまとめ、全体に発表しました(写真)。また、「誰の・何が」自分の考えに影響を受けたか振り返る授業の終末では、「友と話す。その過程で自分の中の言葉と向き合える。」と記述しました。K生は、R生と対談した経験が自分の考えに影響していることを自覚し、自分の言葉との向き合い方に対する考えを広げることができました。



【研究会のまとめ】対談を行う生徒の様子から、本文の精査・解釈と、言葉に対する自己の考えの形成が、整理されず同時に行われていたという指摘がありました。課題として、本文の精査・解釈の厳密さが足りなかったことが挙げられます。単元全体の展開を工夫し、焦点を絞って解釈をしたり、学級全体で共通見解をもたったりする必要があったと考えます。今後は、精査・解釈を行った上で、対談を通してさらに自己の考えを深めていく展開を考えていきたいです。